

[た よ り]

## 北海道支部だより

### 大平整爾

#### 1 日本透析医会と北海道透析医会

(社)日本透析医会の発足期並びにその揺籃期に、北海道から渡井幾男先生・猪野毛健男先生・今忠正先生・廣田紀昭先生らが参画され活躍されている。今先生は日本透析医会副会長、並びに道支部の会長職を長年務めておられたが、2005年以降は小職が道支部長の任を仰せつかっている。

現在、会長を大平整爾、副会長を中野幸雄・戸澤修平・宇野弘昌、常任理事は川村明夫・久木田和丘・伊丹儀友・中西正一郎、理事11名、監事2名の体制で会務を執行している。現在、施設会員72施設、個人会員71名を擁しているが、さらなる会員増を精力的に行いたい所存である。なお、本部役員には戸澤修平先生が常任理事、今忠正先生が監事、大平が地区理事に、また、本部研修委員会委員には大平および伊丹儀友先生が就いている。

#### 2 北海道透析医会の活動

本支部は年1~2回の学術講演会と総会とが主な活動であり、前者の学術講演会は札幌市透析医会(現会長:戸澤修平)との共催で開催している。因みに、2007年3月には浜田知久馬先生(東京理科大学・経営工学科 准教授)をお呼びして、「医学における統計学:その功罪」と題して講演していただいた。2007年7月は深川雅史先生と富永芳博先生から、二次性副甲狀腺機能亢進症のお話を伺った。2008年3月には隈博政先生(現医会・副会長)から「災害時の人工透析

提供体制の確保における情報伝達とエリアネットワーク~福岡県西方沖地震の経験から~」をお話いただいたが、必ずしも忘れた頃に来るとは限らない災害への備えの必要性を深く再認識させられるものであった。

2009年3月には本田宏先生(済生会栗橋病院・副院長)を招聘し、「なぜ日本の医療は崩壊したか、医療崩壊はこうすれば防げる」を主題に情熱溢れるお話を拝聴した。臨床の現場に身を置く私共には喫緊のテーマであり、深く考えさせられた。2009年10月に日本透析医会会長山崎親雄先生にご来札いただき、わが国の透析医療の現況と課題に関して診療報酬制度に絡めてお話いただいたが、きわめて示唆に富む内容であった。

総会では、①日本および北海道透析医会の活動が報告されることの他に、②それぞれの会員が抱える諸問題が提示され討議となる。保険診療、透析スタッフの不足や確保、後継者育成、患者送迎、重症患者の受け入れ先、新型インフルエンザ対策など多岐にわたる問題に関連して種々の意見交換が行われる。

会員最大の関心事の一つは保険診療(レセプト請求上の疑義・不満)に関連しているが、国保および社保の審査委員を務める本支部会員を交えて質疑応答がなされる。審査委員諸氏は、日本透析医会が毎年JSDT会期中に主催する保険審査検討会に出席しており、全国各地のレセプト審査の状況を踏まえて対応してくれている。査定や復活に関する対処は全国的に必ずしも画一的ではないこともあって、一般会員を100%満足させえず、審査委員を務める会員諸氏の悩み

の種となっている。

### 3 北海道における透析医療の状況

2008年12月末現在、北海道には13,429名の維持透析患者が存在し、PD患者450名(3.4%)・HHD患者7名を除いて残りがHD患者であり、RRTの主体がHDにある点は全国の傾向に一致している。腎移植は条件が揃えば末期慢性腎不全患者にとって最大の恩恵となり、北海道では北大泌尿器科・市立札幌病院移植科などが中心となって行われているものの、満足すべき数に程遠い現況にある(2007年の実績:生体腎57件、献腎8件、脳死下2件の計67件)。透析医は、RRTの重要な選択肢の一つである腎移植・臍腎移植に今まで以上に関心を寄せて取り組むべきことが、道透析医会でも度々再確認されてきている。

北海道に特有な問題は医療圏の広さにあり、道央・道北・道東などが独自に中核病院を配して種々の問題に対処せざるをえない情勢にあるが、経営母体を異にする医療機関の協力・連携に、いくつかの困難性が付き纏うことが払拭できかねる状況にある。望まれる病々連携・病診連携は、患者の高齢化や複数の合併症を持つ患者の多発のために、病床占拠期間が一般に長期化しているなどの理由から、現状では必ずしも円滑に運んではいない印象である。この問題は、透析スタッフのエンドレスな過剰労働にも絡めて、透析医療の現供給体制の再構築を促しているように思える。道透析医会の活動にとっても北海道の広大な面積は障害の一つとなっており、「総会」といっても道央の透析医の出席がほとんどである。この点に一工夫が必要であることを、痛感している。

いわゆる「地方会」としては、北海道透析療法学会(現会長:久木田和丘)が最大の会員を擁して年2回の学術集会を開催している。この他の研究会としては、道腹膜透析研究会、道高齢者透析研究会、道MBD研究会、腎移植を学ぶ会などもあり、それぞれが活発な活動を展開している。これら活動の一部は本部研究助成論文として「高齢透析患者の直面する諸問題」「北海道におけるバスキュラーアクセスの現況と課題」な

どに結実している。道腎協ならびに各地に存在する透析患者の会合に適宜講師を派遣することも、私共道透析医会が担う役向きの一つである。さて、道内でも透析技士・透析看護師が独自に研究会などを有して活動していることは喜ばしいことであるが、透析医療の中心に座すべき透析医の一層の広範囲な研鑽が求められよう。

### 4 本支部の役向き

透析医療は医師・看護師・技士・栄養士・MSWなどを交えたチーム医療であり、各職種の連携と協調とが不可欠であろう。これを認めたくえで、プロフェッショナルとしての透析医が一方で結束して、地域に特有な重要課題に主体的かつ指導的に対処すべきであるとする。すべてを日本透析医会の指示に委ねるのではなく、主体的な提案を行えるような力量を備えることが焦眉の急であろう。これを達成するためには、いろいろな直面する問題や課題に対して無関心と沈黙を排して、会員各位が自らの意見を忌憚なく述べる姿勢が第一義に必要となる。会務を司る役員の責務は意見具申の場の設定であり、雰囲気作りであろうと認識している。

### 5 日本透析医学会の北海道開催

第57回(2012年)の日本透析医学会学術集会・総会が、久木田和丘先生(札幌北楡病院・副院長)を大会長として札幌市で開催される運びとなった。このところ、私共道内透析医にもたらされた大きな慶事の一つである。日本透析医学会の北海道開催は、故葛西洋一先生、阿岸鉄三先生に加えて3度目となるが、久木田先生を中心として企画される集会が、全国透析スタッフに満足していただけるものとなることを心から祈念し、応分の助力・支援を惜しまない所存である。透析医療に関する最新情報が得られることの他に、全国各地の透析スタッフと北海道の透析スタッフが親しく交流できる機会が与えられたことを、まことに嬉しく感じている。